

PK-5/00

95
、
5/

数理解析研究所講究録 461

データ・セマンティクスの理論と
実際に関する研究

禁 期間
57.7.28 - 8-4
数

京都大学数理解析研究所

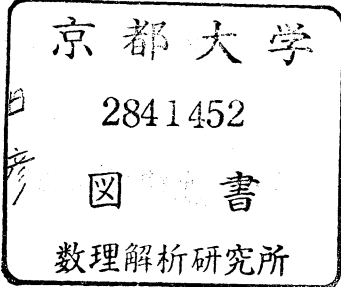
1982年6月

データ・セマンティクスの理論と実際に関する研究

研究集会報告集

1982年 2月 15日 - 2月 17日

研究代表者 上林 弥彦



目 次

1. 序1
東大 工 大須賀節雄
2. 1階多類論理にもとづく演繹的質問応答
システムについて2
富士通(株) 国際情報社会科学研 國藤 進
3. Implementation of GOING : A Datalanguage Using
Graphics Display21
東大 工 宇田川佳久
" " 大須賀節雄
4. Construction of SBDS-F3 : A Relational Database with
Inference Mechanism49
東大 工 宇田川佳久
" " 大須賀節雄
5. 関数型プログラムとデータフローマシン79
電々公社 武蔵野電気通信研 雨宮真人

6.	文字列の同時置き換えのためのパターン・マッチング・マシンについて	102
	九大 理	有川節夫
7.	連想値を用いる完全ハッシュ関数の存在条件について	113
	九大 総理工	玉越靖司
	〃 理	有川節夫
8.	LDP - V1. 5 の総合評価	127
	(財) 日本情報処理開発協会	滝沢 誠
	〃	横塚 実
9.	A Brief Tutorial on the Physical Representation of Database Structure	151
	産業能率大	小林功武
10.	関係データベースへの限量の導入について	173
	国際情報研	竹島 卓
11.	一般化された利用権制御方式について	187
	京大 工	上林弥彦
12.	分散データベースの質問処理におけるデータ転送量の削減について	206
	京大 工	吉川正俊
	〃 〃	上林弥彦
	〃 〃	矢島脩三

13. 構造を有するデータの入力システムCODEの開発.....226

京大 エ 徳田成徳
" " 上林弥彦
" " 矢島脩三

14. Dependencies in a Partially Specified Relation.....236

北大 エ 田中 譲

15. タプル重みづけとしきい値を導入した
関係演算とその応用265

電々公社 武蔵野電気通信研 斉藤宗昭

16. データベースビューサポートシステムに必要な
マン・マシン・インタラクションについて.....278

東北大 電気通信研 増永良文

17. 位相情報空間型データベースシステム.....288

阪大 エ 打浪清一
" " 手塚慶一

18. 外延と内包を取り扱える拡張データベースシステム...322

阪大 エ 野田通弘
" " 打浪清一
" " 手塚慶一

19.	データベース作成の一事例	
	— 電気化学データベース —353
		横浜国立大 工 有澤 博
		" " 仁木克己
20.	DATABOX368
		北大 理 富樫雅文
21.	フレーム理論に基づくエキスパート・システム開発	
	ツール FMS の試作381
		東京電気大 理工 上野晴樹
22.	A New Method of Model Description	
	— Use of Knowledge Base and Inference —	...408
		東大 工 大須賀節雄

序

本報告書は京都大学数理解析研究所の共同研究事業の一つとして「データ・セマンティクスの理論と実際に関する研究」のテーマのもとに、1982年 2月15日より 2月17日までの 3日間にわたって行なわれた研究集会で発表された論文を中心にまとめたものである。

本研究の目的は計算機内で表現されるデータのセマンティクスを追求することにある。 情報処理は基本的には意味に基づいて進められるものであるが、それを形式化することによって機械的処理を可能にしている。 この形式により意味の一部が表わされているが、従来、データが表わす意味は非常に限定されていた。 近年、長期的にデータを記憶して利用するという傾向が強まると共にデータに意味をより積極的に表現させるための形式や処理方法にも関心が向けられるようになった。 しかし、このようなデータ意味論は情報論の本質にかかわり、その深さにおいてもそれが関わる部分の広がりからいっても短期間で解決する問題ではない。 したがって今回の研究会における限られた時間内での議論では決して十分なものでなく、大半のものは今後の研究にまかせられている。 この意味で今後多くの研究者の御批判を受けることにより、これらの研究をより一層発展させることを参加者一同心より願ってやまない次第である。

最後に本報告書を作成するにあたり、本研究会の開催を許可し、報告書作成に御尽力頂いた京都大学数理解析研究所に心よりなる謝意を表す。

1982年 6月10日

東京大学 工学部 境界領域研究施設

大 須 賀 節 雄